

# 富岡製糸場に勤めた女性たちのライフヒストリー ～昭和期の「あたりまえ」の書き残し～

高崎商科大学職員 川又 彩夏

富岡製糸場は1872（明治5）年の創業から、1987（昭和62）年の操業停止まで多くの女性たちが働き、生活した場である。彼女たちの様子を知るすべとして、回顧録『富岡日記』（和田英）があるが、その記述は明治時代・官営期のものである。以降、民間に払い下げられてからは、そのような記録は表立って存在せず、当時の様子を知る手掛かりは少ない。一方で、戦後の様子について記憶している元従業員や近隣住民は少なくない。本研究では、ライフヒストリー法を参考にし、彼ら・彼女らが有する記憶や記録から、女性たちの仕事や生活の「あたりまえ」を書き残していく。

## 1. 問題背景と目的

富岡製糸場はその設立以降、115年にわたり、多くの女性たちが働き、生活した場所である。

本研究は、富岡製糸場で過ごした女性たちのリアルな労働や生活を記録することを目的としている。富岡製糸場は創業から操業停止まで官営・三井・原・片倉と大きく四つの区分に分けることが可能である。官営期における女性労働者（工女）の記録は和田英による『富岡日記』からその様子を見出すことができる。原時代を中心とした記録は『富岡日記』のような回顧録ではないものの、『富岡製糸場誌』に掲載されている「工女の思い出（ききがたり）」（富岡製糸場誌編さん委員会 1997:1131-1187）にまとめられている。一方で、1939（昭和14）年からその経営を担った片倉工業期間における女性たちのリアルな仕事や生活の様子をまとめたものは決して多くない。

筆者は富岡製糸場周辺でのフィールドワークを通じ、富岡製糸場操業停止前の様子を記憶している人に出会うことができた。しかし、それらは彼らの記憶や個人の記録であることがほとんどである。

本研究では、2020年度絹ラボ川又研究（以下、2020年度研究）を継承し、実際に働いた女性たちや近隣の地域住民らが有する当時の記憶や記録を掘り起こすことで、特に戦後の富岡製糸場で働いた女性たちのリアルな様子や「あたりまえ」を書き残すこととする。

## 2. 先行研究の整理——戦後の富岡製糸場に関する研究

戦後の片倉工業富岡製糸場の労働や従業員の生活にスポットを当てた研究は決して多くない。これまで、片倉工業の元従業員に関するインタビューには、茂木（2017）にまとめられた、富岡市教育委員会による聞き取り調査、富岡製糸場総合研究センターによる聞き取り調査、富岡市による聞き取り調査が存在する。しかしながら、これらの記録はいずれも短文で、当時の様子を詳細に示している資料とは言い難い。

元従業員や関係者らの語りを扱った資料として、シルクカントリーぐんま連絡協議会（2016）がある。21名の聞き取りが掲載され、戦時中に落下傘用の生糸を取った女性従業員の話、生糸売買のため富岡製糸場に入入りしていた男性の話、社宅に住んでいた子供の話等が記録されている。いずれもそれぞれの語りを丁寧に記されており、従業員に限らず、様々な切り口から語られていることから、当時の様子を多角的に知ることができる重要な資料である。しかしながら、本研究の目的は女性従業員の労働や生活に関し共通点を見出し、当時の「あたりまえ」を書き残すことであり、この点について、語りの内容が各々異なるため、本資料だけでは、女性たちの共通した「あたりまえ」を見出すのは難しい。

表 シルクカントリーぐんま連絡協議会（2016）に掲載された関係者の語り

テーマ	語り手の立場	富岡工場での勤務時期
落下傘用の生糸づくり	元従業員（女性）	1943（昭和18）年～1950（昭和25）年
卓球部に所属し、全国大会にも出場	元従業員（女性／線糸・工務課・総務課／卓球部）	1945（昭和20）年～1955（昭和30）年
3代にわたる製糸場勤務・生活	元従業員（女性／総務課）	1958（昭和33）年～数年
蚕種製造所に期間工として勤務	元従業員（女性／蚕種製造所）	1961（昭和36）年～1962（昭和37）年
学徒動員で、落下傘の生糸づくり	元学徒動員（女性／線糸）	1944（昭和19）年10月～ 1945（昭和20）年3月
場内の診療所で看護師として活躍	元従業員（女性／看護師）	1959（昭和34）年～1963（昭和38）年
養蚕指導や繭の買い入れ、人事を担当	元従業員（男性／繭の買い入れ・総務課人事係）	1955（昭和30）年～1987（昭和62）年
煮繭場ではたらいた10年間	元従業員（女性／線糸・煮繭場）	1961（昭和36）年～1971（昭和46）年 ※働き始めた年は記載なし。退職年より逆算。
繭の乾燥に従事	元従業員（男性／乾燥業務）	1956（昭和31）年夏～3か月間
給繭機に煮繭を供給していく仕事	元従業員（女性／煮繭の供給）	1968（昭和43）年～半年間
17時のサイレンと煙突の煙	元従業員の家族（男性）	1955（昭和30）年前後～1961（昭和36）年よりも前 ※語り手の家族（元従業員）の勤務年数。
激動する戦前戦中の富岡製糸場	元従業員家族（男性）	1919（大正8年）年～1950（昭和25）年 ※語り手の家族（元従業員）の勤務年数。
自由に遊び回った社宅住まいの日々	元従業員家族（女性）	1952（昭和27）年～1955（昭和30）年
場内で遊んだ体験	元従業員家族（男性）	1957, 8（昭和32, 33）年～5, 6年
燃料を納品し、工女と結婚	元取引業者（男性）	1957（昭和32）年ごろの語り
工女の霊を供養	元従業員や蚕霊を弔う寺	
生糸卸商として取引	元取引業者（男性）	1970（昭和45）年ごろの語り
蚕糸高校でつくった繭を納品	元蚕糸高校職員（男性）	1982（昭和57）年ごろの語り
年5回、リヤカーで繭納品	元取引農家（男性）	戦前から戦後にかけての語り
蚕種製造所に米を納品	元取引業者（男性）	1955（昭和30）年ごろ～1987（昭和62）年の語り

（シルクカントリーぐんま連絡協議会（2016）をもとに筆者作成）

### 3. 研究方法

筆者は2020年度研究以降、戦後の片倉工場富岡工場働く女性たちを中心としたインタビュー調査を実施。彼女たちの語りを通じ、そこで働く女性たちにとってそこでの経験がいかなるものであったかを整理するよう心掛けた。本研究は、2020年度研究を継続させ、戦後1950（昭和25）年から富岡製糸場が操業を停止した1987（昭和62）年の間にそこで働き、暮らした女性たちの記録や記憶を対象とする。ライフヒストリー法を参考に、当事者自身に経験を語ってもらうことで、よりリアルな視点を得るほか、当時の様子を記憶している地域住民らの話を踏まえることで、より多角的に彼女たちの労働と生活を記録する。

今回、片倉工業富岡工場に勤務経験のある女性2名、富岡市内在住で当時の様子を知っている2名の合計4名に聞き取り調査を依頼。できる限り、彼女たちの記憶に寄り添うことで、よりリアルな「あたりまえ」の書き残しを試みている。

### 4. 内容

今回、それぞれのインタビューーに対し、複数回に分け、仕事や寮生活の様子をインタビューする予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、十分な聞き取りを行うことができないでいる。十分な聞き取りではないものの、彼女たちの記憶をもとに、当時の様子を示すこととする。なお、以降は、2020年度研究並びに、2021年度研究の聞き取りをもとに、「労働に関する記憶」「生活に関する記憶」に関し、それぞれ整理していく。

表 2020年度以降研究協力者一覧（インタビューのみ）<sup>(1)</sup>

人物	A	B	E	C	F	D	G	H	O	P
インタビュー実施日	2020（令和2）年9月15日	2020（令和2）年10月20日	2020（令和2）年10月20日	2020（令和2）年12月20日 2021（令和3）年11月24日	2020（令和2）年12月20日	2020（令和2）年12月26日	2020（令和2）年10月26日	2021（令和3）年11月19日 2021（令和3）年12月23日	2021（令和3）年11月23日	2021（令和3）年12月26日
生まれ	1940（昭和15）年	1932（昭和7）年	1934（昭和9）年	1938（昭和13）年	1646（昭和21）年	1961（昭和36）年	1937（昭和12）年	1963（昭和38）年	1947（昭和22）年	1941（昭和16）年
性別	女性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	男性
勤め先	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	富岡製糸所	片倉工業富岡工場	製糸場近隣住民（従業員ではないため、該当せず）	製糸場近隣住民
入社年	1956（昭和31）年	1946（昭和21）年	1948（昭和23）年ごろ	1954（昭和29）年	1971（昭和46）年	1977（昭和52）年ごろ	1960（昭和35）年	1978（昭和53）年	従業員ではないため、該当せず	従業員ではないため、該当せず
退職	1959（昭和34）年	昭和30年頃（8～9年務め退職）		1987（昭和62）年		1981（昭和56）年ごろ	1974（昭和49）年	1983（昭和58）年	従業員ではないため、該当せず	従業員ではないため、該当せず
主な仕事内容	糸取り	糸取り 揚げ返し	繭乾燥 繭出荷	糸取り 寮の管理	原料科 総務部人事課	糸取り	人事	糸取り	従業員ではないため、該当せず	従業員ではないため、該当せず

（筆者作成）

#### 4. 1. 労働に関する記憶

昭和30年代に勤めたC氏、昭和50年代に勤めたH氏ともに、3月中旬に入社式であった。

入社に際しては、入社案内をもとに各自が日用品や衣服、布団を持参する。昭和30年代に勤めたC氏は「当時は、洗面器だ、洗濯石鹸だ、化粧品だ、なんだかんだとか。寝間着だとかそろえて。日用品と着るものだとか」を行李に入れて寮に持ち込んだという。裕福な家庭から来る人は行李がパンパンになるまで荷物を詰め、縄で縛って持ってきていた。そんな人を見て、C氏は「みんな、いっぱい持ってくる人は生活が楽なんだな、と思いました。子供ながらに…子供って言うかそのぐらいの年齢（15歳）の時に。寝間着なんか持ってこれない人もいたんです」と語った<sup>(2)</sup>。

昭和50年代に勤めたH氏は就職にあたり、職場から支度金、腕時計、ボストンバックが支給された。支給されたボストンバックと自分で用意した衣装ケース一つに日用品をまとめ、みの布団と一斗バケツを持って入社したという。

C氏、H氏ともに入社後の約3カ月間が養成期間であった。3カ月の養成期間は仕事を覚えるのはもちろん、そこでの生活を覚える期間であった。

H氏は3月半ばの入社後以降、2週間程度は先輩について仕事を学び、だんだん仕事を一人で任されるようになった。H氏は「糸取りが楽しかった」という。繰糸の仕事は、とにかくきれいなシルクを数多く作ること。糸が切れず自動繰糸機が回り続けていると「サイコー！時間をもったいない。本でも読みましょうかしら？」といった具合で、繰糸所から背伸びをして娯楽室のテレビを覗き見たり、定時制高校に通う同僚と繰糸機越しに「問題出すよ！第一問！」と問題を出しあったり<sup>(3)</sup>、「今日、門前（の店）行く？」「じゃあ、何を買っておいて！」などと話をしながら仕事をしていたと振り返った。仕事中はピリピリした様子もなく、楽しんで業務に取り組んだという。

一方で、彼女たちの上司に当たる係長からは、「繰糸所に一歩足を踏み入れたら学生じゃない」と言われ、気持ちの切り替えの必要性についても学んだという。

#### 4. 2. 寮生活に関する記憶

##### 4. 2. 1. 衣

女性従業員は就業中、会社から貸与された作業着を身につけ業務にあたる。戦後の片倉工業では、動きやすさを重視したズボンスタイルが採用され、頭にはキャップを身につけていた。しかし、その詳細は就業時

期によって異なるようで、昭和30年代に働いたC氏は当時の様子を以下のように振り返る。

スカートとジャンパーだったんです。作業着でスカートだった気がしたんですけど。作業するにはやっぱりスカートじゃ足元が濡れるでしょ。私もスカートで（繰糸所に）行ったことがあります。だけど、濡れちゃうんで自分で持って行ったズボンははいていましたよ。（絶対スカート）じゃなかったです。靴も黒い靴が貸与されたような気がするんだけど、そのうちに（靴を）自分で買うようになって、白い靴買って。（白い靴は）汚れるんで、粉歯磨き（粉）で塗っちゃうんです。（C氏インタビュー 2021年11月24日実施より）<sup>(4)</sup>

H氏時代の作業着は、白いシャツに水色の綿パンツ、ナースキャップのような帽子、前掛けを身につけ、作業時に利用するタオルを肩や腰、前掛けにかけるスタイルであった。夏場の暑い時期でも繰糸所では窓を開けることができず<sup>(5)</sup>、ズボンの裾をまくっていたこともあったが、その際には、係長らから裾を伸ばすよう言われたという。これは、けがをすることを防ぐためであった。

また、作業着に汚れがあると、繭に移ってしまう恐れがあるため、作業着の汚れは絶対に許されない。そのため、洗濯は重要なタスクであった。就業中の作業着の管理は従業員自身で行われ、自分たちで洗濯・アイロンがけを行った。作業着は毎日交換するため、二日もすると、入社時に持参した一斗缶バケツに洗濯物がたまってしまう。洗濯はこまめにする必要があったのだ。H氏の時代、寮の近くに20台ほどの洗濯機が設置された。しかしながら、従業員数と比べるとその数は決して十分ではなく、早い者勝ちである。H氏は同僚と協力しながら、洗濯機を確保する様子を次のように語った。

（繰糸機の）一号機・二号機だと、入り口一番手前じゃないですか。その時は（反対の機械を担当する同僚に）「そっち見てやるから洗濯機2台取っておいて」とか。終わる5分くらい前になると（その同僚に）ハンカチを渡しておいて。そうすると（勤務交代のため）B班の人が（自分の後ろで）待ってるんだよ。で、「ビー」って（交代のチャイムが）鳴ると、（B班の人に）「お疲れ様でした。お願いします」といって、（同僚が）サーって飛んでって。こっちは「お疲れ様でしたあ」ってゆっくり。それで後になって（同僚に）「鉛ちゃん買ってやるね」とか。（H氏インタビュー 2021年12月23日実施より）

繰糸の業務は水を使う。作業着は一日で汚れてしまうにも関わらず、従業員みんながこぞって洗濯機を使うことから、洗濯は皆必死だった様子がうかがえる。

また、H氏と同じく昭和50年代に働いたD氏<sup>(6)</sup>は洗濯後、入社時に持参したアイロンを使い、作業着の上着・ズボン、キャップのすべてに皺がないよう「ピシッ」とアイロンをかけていたといい、結婚後のアイロンがけに苦勞することはなかったと語る。

もちろん、彼女たちは24時間365日作業着を着ているわけではない。C氏やC氏の友人は片倉学園での学びを生かし、仕事の隙間時間を使い、洋服を縫っていたという。消灯前であれば、片倉学園のミシンは自由に利用することができた。作業の際は、みんなで「何縫ってるの?」「明日これ着ていくんだ」などと話しながら取り組んでいたという。C氏自身も妹のためにワンピースを縫ったり、流行りのサーキュラスカートを型紙からつくり、友人と遊びに行く際に着用していた。

#### 4.2.2. 食

食事については、朝・昼・晩の三食が敷地内の食堂で提供されていた。

しかしながら、H氏が勤めた50年代は工場が休みとなる土曜日・日曜日は食堂も休みとなった。その際は、宮本町に位置したスーパーで食材や総菜を購入し、寮の自室で簡単な食事をしていた。そのほか、まちなかの肉屋のコロッケを数多く買い、寮でコロッケパーティーをしたり、寮の皆がそれぞれの店で出前を取って、部屋で楽しんでいた。

また、彼女たちにとって、なくてはならない店が富岡工場正門の目の前にある日用品店（現在の「はや味」（富岡市富岡51）に位置した店）であった。H氏は前半の仕事を終え、午後からの定時制高校に向かうまでの間、食事がとれない時などに同期や後輩にパンなどを買っておいてもらっていたという。2020年にインタビュー

したD氏もそこで菓子類を購入し、同僚の友達と寮の部屋で楽しんでいと語った。

また、H氏は入社後しばらくすると、片倉学園に通っていた先輩従業員から、「今日、料理教室で、こんな作るけど、帰ったら食べに寄る？」と言われ食べたり、「今度の休日（実家に）帰るの？帰らないなら何か作る？」などと声をかけてもらったこともあり、先輩従業員が作る食事を楽しんでいたこともあったという。

#### 4.2.3. 住

C氏、H氏いずれも入社後は鎚寮で生活することとなった。

C氏が入社当時は、15畳程度の大部屋で10名程度の少女たちが生活を共にした。C氏のころは、1名の教婦が部屋係として、練糸の業務を教える他、部屋係も担当し、C氏ら新入社員の面倒を見ていた。生活の面倒のほか、買い物のため町に連れて行ったりしてくれたという。

部屋には新潟県や長野県、甘楽町秋幡など、出身地が異なる同期が一緒になった。同い年の女子が集まると、おしゃべりも弾み、「消灯になっても、やたらしゃべってるでしょ、いつまでも。隣の部屋も『うるさいよ』なんて。1回、2回注意されてもなかなかまたね。だんだん大きな声になってきて。すると、ガラッと（扉）開けてきて『いい加減に寝ろ』なんて言われて。」と寮の部屋がにぎやかだった様子を語る。当時の様子を「修学旅行みたい」だったと表現し、「付き合ってる彼氏の話したり。『あんなん、よせ、よせ』なんてみんなに言われて。『あんなん、あれはこうだからよしといたほうがいいよ』とか、（ほかの部屋の人に対し）『また、こういうんだよ、やんなっちゃうね』って。『あれはああいうんだから、ほっときゃいい』なんて言われたり」し、「（話の内容や様子は）いつの時代も同じだと思う」と話した。

H氏が勤めた50年代は鎚寮に藤岡高校の定時制に通う女性従業員が、榛名寮、浅間寮、妙義寮に片倉学園に通う女子従業員が生活しており、生活スタイルによって寮そのものが分けられていた。部屋割は勤務体系<sup>(7)</sup>によって分けられている。

入社直後、H氏は鎚寮の部屋で部屋長1名と出身地も異なる同期7～8名（多い部屋では10名程度）の9名程度で生活をした。その頃は部屋長の先輩従業員<sup>(8)</sup>が「洗濯行ってきた？」「お風呂行ってきた？まだだったら、何時だからあれして」「あと30分で学校に行く時間だよ」など、「本当に優しく教えてくれ生活の面倒を見てくれていた」といい、入社後2週間は特に、言われるがままに先輩についていき、部屋長に倣い掃除や洗濯といった一日の時間の使い方などを吸収するように日々を過ごした。新入社員同士もわからないことを共有しあったり、「こうなんだって、ああなんだって」「お風呂何時だって」と同期同士で伝達していった。H氏はその様子を「最初は旅行に行った気分だったかもしれない。仕事もまだわからないし、似たような人たちが集まってワイワイやってたから。女の子同士だし。初めて会う人たちだったし、旅行に行った気分だった」と表現した。

入社2年目以降、部屋が変わると、部屋長はおらず、同期を中心とした部屋になる。入社直後のような、教える・教わるということもない。洗濯機をいかに早く回すか、いかにお風呂に早く入り自分の時間をいっぱい作るかを心掛け、同室の同僚を「同級生で仲間だけどライバル」と表現する。

寮での生活は、あわただしく、休日にはにぎやかであった。平日、夕方の定時制高校が終了し、寮に戻ってくると消灯する20分の間で歯を磨き、あっという間に消灯を迎え、皆眠りに落ちる。一方、休日は「シーンとしていることなんてない」という。特に休みの日はどこかの部屋から音楽が聞こえたり、同期が部屋に集まってご飯を持ち寄ったり自由であった。

H氏のころは、部屋の掃除は寮の部屋ごとの当番制であった。仕事が終わりと、学校に行くまでの時間や仕事の休み時間を使い、各部屋を掃きに回る。そのため、朝起きて布団を押入れにしまうのは絶対であった。

H氏は規則正しい生活を身につけたのは、仕事はもちろん、寮生活を通してであったと語る。

### 4.3. 学び

2021年度研究では、2020年度研究で十分に扱うことのできなかつた、片倉工業の外の学び——定時制高校の学びについて掘り下げることとする。

#### 4.3.1. 定時制高校での学び

片倉工業は昭和30年代以降、従業員の定時制高校への進学支援も開始した。富岡工場の従業員は、まずは富岡高校の定時制、二交代勤務が開始した1972（昭和47）年以降は藤岡高校の定時制に進学した者もいた。

H氏は仕事の傍ら、藤岡高校の定時制に通う高校生であった。当時の藤岡高校定時制は3クラスに分けられ、1組は昼間仕事し、夜間に定時制に通う生徒。2組、3組が二交代勤務の仕事をする片倉工業や鐘紡、ゲンサンなどに勤める生徒たちという様に分かれており、H氏が籍を置いた3組は片倉工業の従業員がほとんどであったと語る。

学校生活では、他クラスや他学年との交流もあり、H氏はその当時を振り返り、同級生から「俺さ、2組のなんたかって奴気になってるんだけど、手紙渡してくれる？」「自分で渡せば？」などのやり取りがあったり、後輩から慕われるシーンもあったと話す。教室の机は全日制の生徒と同じものを利用するため、机の上に書かれた「あなたはどこの会社のなんていう人ですか？」というメッセージに対し、友人同士で「返事書いてやれば」「いやだよこんなの」「じゃあ、『あいうえお』って書いとけば？」などのやり取りもしていたという。H氏の先輩では、そのようなやり取りから結婚に至った人もいたといい、このようなエピソードは「嘘のような本当の話」と語る。

### 4.4. 企業の視点からの女性の労働と生活の切り取り——募集人と女性従業員

募集時期になると、人事やボイラー、食堂等を担当している男性職員が募集人となり、各地の中学生の家に募集に回った。新入社員の入社後は、募集人の彼らも通常業務に戻るため、同じ敷地内で勤務することとなる。当時の様子について、H氏は下記のように語る。

フレンドリーだったよね。やっぱり面倒見がいいというか。どの人もそうだけど、声かけてくれてたね。「どうか、元気か？」「困ってることないか？」って…。連れてきたこと責任かもしれないけど、そういうのを場面、場面でよく見かけました。（H氏インタビュー 2021年12月23日実施より）

私のご飯食べに行かなかつたりするじゃないですか、忙しかつたりとかして。そうすると（私を見かけると）、「食堂、美味しいご飯だよ？」「どうして食べに来ないんだ？」とか言って。「そうじゃなくて、忙しかつたから」とか言うと、（募集人の社員に）「忙しいとか言って、体が第一、第一」とか（言われて）。当たり障りのないように。…あくまでも、優しく包み込むような言葉をかけてくれました。（H氏インタビュー 2021年12月23日実施より）

募集人の多くは、50代後半から60代程度で、女性従業員たちから見ると「おじちゃん」であった。募集人からしても、場合によって従業員とはいえ、自分の娘よりも若い少女たちに映ただろう。彼らが彼女たちを常に気にかけていた様子がうかがえる。

## 5. 考察

2020年度研究で、筆者は仕事と生活を共にする女性従業員らの関係を、先輩・後輩関係にとどまらず、疑似的母子・姉妹関係、企業（人事担当者ら）との関係を疑似的親子と位置付けている。2021年度研究において、その考察をブラッシュアップしたい。

### 5.1. 視点1：「つながり」の再考察

2020年度研究で寮生活において、入社したての15歳の少女たちは先輩従業員から寮生活のルールや掃除、洗濯を教わることを通じて、先輩従業員たちを母や姉のようだと表現することから、先輩・後輩の関係性を

疑似的母子・姉妹と示した。

2021年度研究において新たにインタビューをしたH氏からもその様子をうかがい知ることができた。特に、H氏は入社当時、定時制高校に通う4年生（19歳、20歳ほどの女性先輩従業員）を「憧れの存在」「レディって感じ」であったと表現しており、年の離れた先輩従業員に対し、あこがれのようなものを抱いていたことがわかる。

また、2020年度研究では十分に示すことができなかった横のつながりについても、考察したい。C氏、H氏いずれの語りにおいても同期がそろそろ寮生活を「修学旅行」や「旅行」と表現しており、入社当初から同期同士が和気あいあいとしている雰囲気であることが読み取れる。入社後は生活面においてもよき「ライバル」としての側面を見出すことができた。退職後もそのつながりは続き、C氏、H氏ともに現在でも年賀状や電話のやり取りをしているという。2020年度にインタビューを行ったA氏も退職後、就労時に仲の良かった同僚を訪ねたといい、単なる従業員としてのつながりではなく、そこには同期を中心に友情のようなものを見出すことができる。

さらに、2020年度研究では、彼女たちを管理する立場である片倉工業が、人事業務として彼女たちの様子を一方的に把握するだけでなく、コミュニケーションを通じてお互いの信頼関係を構築していたことが明らかになった。2021年度研究では、常に人事を担う立場の従業員以外からもその様子をうかがい知ることができた。彼らが女性従業員に対し、温かいまなざしを送っていた様子から、女性従業員との疑似的親子関係の考察を強めることができよう。

## 5.2. 視点2：「教え」の再考察

2020年度研究では、労働、片倉学園での学びというフォーマルな教えと、寮生活というインフォーマルな場面での学びを通じて、意識的・無意識的に様々な学びを身につけていったことを示した。

この教えについて、女性従業員らの視点から検討したい。

2021年度研究において、C氏は自身が入りたての頃は、「先輩がいろいろ指導してくれたり、色々教えてもらったりする」が、年数を重ねることで、「自分がやっぱりお手本になんなくちゃって気持ちも多少は出てくる」と話し、自分が先輩を手本にするだけでなく、後輩の手本としての自覚が芽生えた様子を語っている。H氏は「いっぱい先輩がいる。寮ではこの先輩のやり方がいいな。学校（定時制高校）では、この先輩のやり方がいいな。…中略…仕事では、ああいう教婦さんになりたいな」といった風に「たくさんのモデルがいた」という。自分自身も「片倉工業にいた下級生、後輩で一人でも（自分のことを）そういう風に思ってくれる人がいたらいいなと思う」という。つまり、先輩従業員・後輩従業員は疑似的な母子・姉妹であると同時に、疑似的な母・姉（先輩従業員）は自身が歩むべきモデルでもあったと言えよう。さらに、後輩従業員が入れば、今度は自分自身がモデルにされる側となる。つまり、片倉工業富岡工場において、インフォーマル・フォーマルな学びは後輩に受け継がれ、その中身を少しずつ変えていったと考えられる。

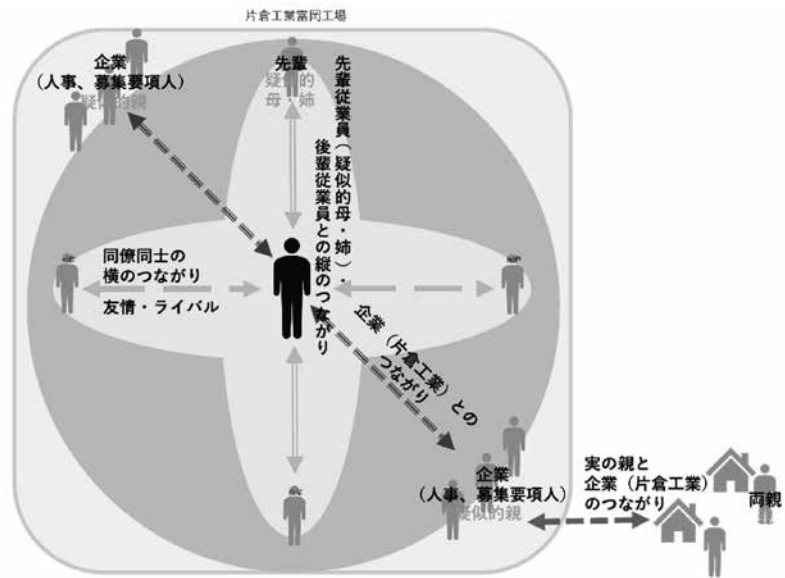


図 片倉工業富岡工場におけるつながり (2020年度研究の修正)  
(筆者 (2021) 修正)

### 5.3. 研究結果に対する考察のまとめ

2020年度研究において、片倉工業富岡工場がそこで働く女性従業員にとって「小さな社会」であり「大きな家族」としての側面を有していた点を検討した。

その小さな社会で培った経験は、仕事としての経験、寮生活の経験いずれにしても彼女たちの基盤となり、次なる社会（結婚や再就職）で生かされている様子が示された。特に、2021年度、H氏は、片倉工業富岡工場の仕事・寮生活を通じて身につけた、日々の時間の使い方や、仕事における様々な概念（ムリ・ムダ・ムラといった3Mや報・連・相）が別の会社で生かされている様子を語った<sup>(9)</sup>。2020年度にインタビューを行ったD氏やB氏も寮生活や片倉学園で身につけた家事スキルが結婚後の生活で生かされている様子を語っている。

つまり、片倉工業という「小さな社会」を飛び出した女性たちではあるが、この「小さな社会」で培った経験を次の「社会」で発揮できたのであろう。片倉工業富岡工場は女性従業員にとって次なる社会との懸け橋の役割を担っていたのかもしれない。

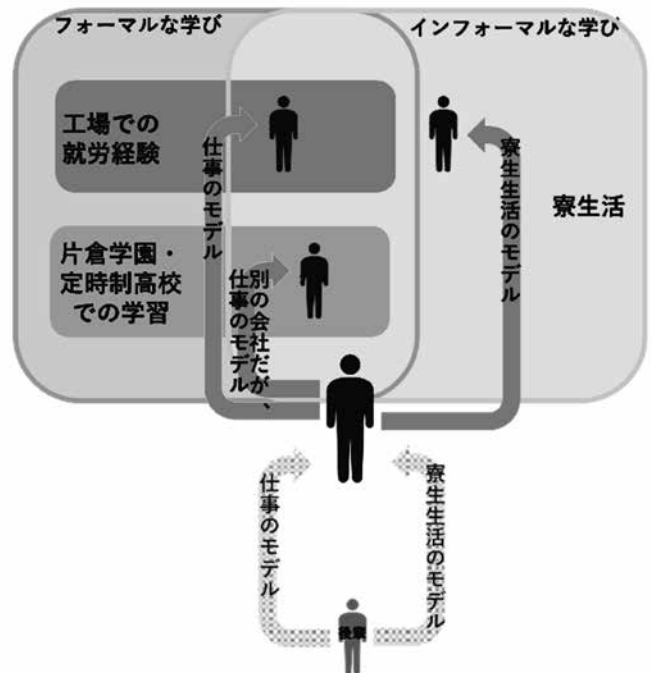


図 学びの循環  
(筆者 (2021) 修正)

## 6. 今後の展望

### 6.1. 働いた女性たちの語りを残すために

2021年度に聞き取りを行ったC氏、H氏はもちろん、2020年度研究でインタビューを行ったインタビューは皆、片倉工業富岡工場で過ごした時間を楽しそうに語っている。C氏は当時の生活を「本当に楽しかったの。一つも無駄になるものがないと思って。」と振り返る。H氏も当時の様子を「本当に楽しかった」と語る。

彼女たちが当時の仕事や寮生活、学校生活を語る際の表情は大変生き生きしたものであった。しかしながら、本報告書では、その様子をつぶさに記すことはできていない。特に、2020年度研究、2021年度研究のような労働に関する記憶、寮生活に関する記憶の衣・食・住、学びに関する記憶の分け方では、彼女たちの娯楽やその後の人生を語るに十分とは言えない。片倉工業富岡工場での生活をよりリアルに、そしてそこでの経験がいかに彼女たちの糧になっているかを語るためには、分類方法を見直す必要がある。次年度以降も本研究を継続し、次年度は和田英が記した『富岡日記』のように、これまでのような客観的な書き方ではなく、その生き生きとした様子を書き残せるよう、まとめ直すこととする。

### 6.2. 富岡製糸場で働いた女性たちから読み解く社会

彼女たちは仕事や寮生活などを通じて、片倉工業の社員としての価値規範や流儀を身につけるだけでなく、一人の社会人としての価値規範を形成していき、次なる社会——別の企業での仕事や、結婚・子育て——で、新たな役割を担っていった。つまり、彼女たちは片倉工業富岡工場で働くことで、「第二次社会化」を経験している。



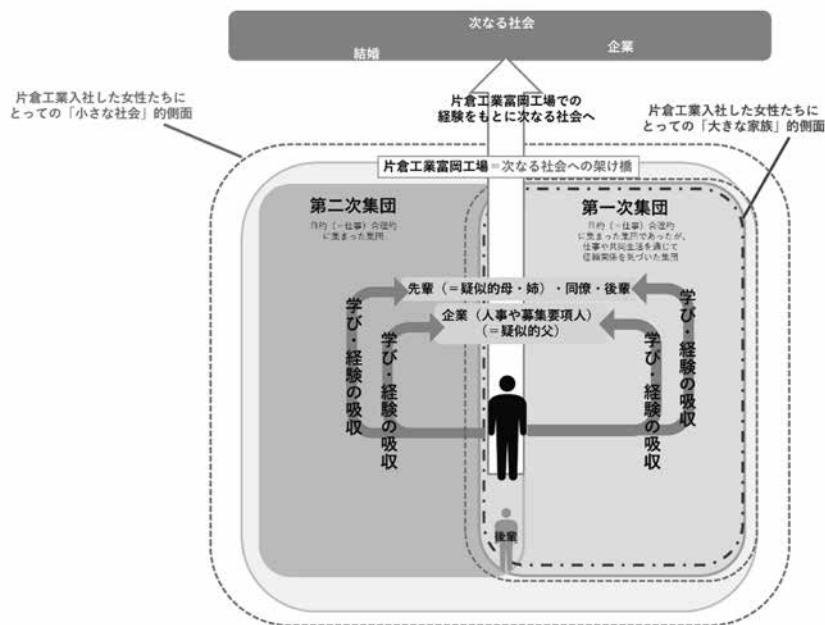


図 片倉工業に入社した女性たちにとっての「小さな社会」と「大きな家族」と次なる社会への接続  
(筆者(2021)修正)

しかしながら、日本全国を見渡せば、そのような女性たちの生活や経験は片倉工業富岡工場に限った話ではない。明治から昭和の高度経済成長まで日本の産業を支えた繊維産業においては、中学を卒業した年ごろの女性たちの多くが、仕事と寮生活を経験している。その点で、数多くの女性たちが、それぞれの企業での経験を通じ、価値規範を形成しているといえる。しかしながら、それらは企業ごとに異なり、共通したものが一切存在しないのであろうか。片倉工業が社会への架け橋であったのであれば、ほかの企業も同様の側面があるのではないかと。人々の相互作用に注目し、社会を分析するミクロ社会学的な観点を踏まえて当時の彼女たちの生活や労働をとらえることで、当時の共通した社会的価値規範などを見出すことができるのではないかと。この点については、今後の課題としたい。

## 謝辞

2021年度、本研究を進めるにあたり、特に片倉工業元従業員のC氏、H氏には多大なるご協力をいただいた。O氏、P氏からは、外部からの目線で片倉工業元従業員らに語っていただいた。本報告書について十分に扱うことができなかつたため、次年度研究に向け改めて検討させていただきたい。研究にご協力いただいた皆さまには改めてここに御礼申し上げる。

## 注

- (1) C氏の生年月日については、2020年度研究には1939(昭和14)年と記載したが、正しくは、1938(昭和13)年である。2021年度研究で修正した。
- (2) C氏は当時の同僚に対し、「みんな家族の足しのために片倉工業に来た人が多かったですね」と振り返った。
- (3) 前半勤務であれば、勤務一般(通い)の人がまだ出勤せず、寮で暮らす従業員だけの8:00までの間で同期同士で問題を出し合うなどしていたという。8:00以降の一般勤務の人が来るとそのようなことはできなかつたと話す。
- (4) 富岡市(2020)は女性労働者の作業着について、下記のように記している。C氏の記憶との整合性については、

今後の課題となる。

この時期（戦時下）の女性従業員はブラウスの上に、スフ（ステープル・ファイバー）が混入された生地で作られたジャンパースカートと上着を着用していたことが写真等の資料からわかっています。…（中略）…

なお、この服を着用して作業している様子は写真では確認できますが、これは皇紀二六〇〇年の記念に撮影されたもので、普段の作業服として従業員が着用していたかどうかは不明です（富岡市2020:113）。

- (5) H氏は繰糸所の窓を開けると、風が入り、生糸が切れてしまうことから、窓は開けずに作業していたと語る。
- (6) 2020年度研究時のインタビューノートより。
- (7) 1947（昭和22）年に労働基準法が施行され、1日の労働時間が8時間になると、早番・遅番の2交代勤務がスタートした。繰糸や揚げ返しなど、生産に直結する仕事は2班に分けられ、1週間程度で早番勤務・遅番勤務が交代する。早番勤務は5：00～13：30まで、遅番勤務は13：30～22：00までの勤務体系である。早番勤務・遅番勤務は部屋ごとに振り分けられる。
- (8) H氏が入社した当時、部屋長は生活を教える立場であり、業務を教えたのは教婦であったという。同時期に働いたD氏も2020年度研究において、同様の記憶を語っている。
- (9) H氏は片倉工業を退職後、別の製造業に従事。複数社の勤務を経験し、最終的には課長代理の立場を担った。

## 参考文献

- R. N. ベラー『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』島藺進・中村圭志訳（みすず書房・1991年）
- 石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか——技術とジェンダーの日独比較社会史』（ミネルヴァ書房・2018年）
- 宇都宮京子編『よくわかる社会学』（ミネルヴァ書房・2006年）
- 小泉和子『少女たちの昭和』（河出書房新社・2013年）
- 川又彩夏「富岡製糸場に勤めた女性たちのライフヒストリー——昭和期の「あたりまえ」の書き残し」『絹ラボ研究成果報告書』（2021a）。
- 川又彩夏「富岡製糸場に勤めた女性たちの労働と生活——戦後の片倉工業富岡工場を事例に」『高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター紀要』7（2021b）
- シルクカントリーぐんま連絡協議会『平成27年度「富岡製糸場と絹産業遺産群」調査研究——富岡製糸場に関する聞き取り調査』（2016）
- 田中正人編『社会学用語図鑑』（プレジデント社・2019年）
- 辻浩和・長島淳子・石月静恵編『女性労働の日本史——古代から現代まで』（勉誠出版・2019）
- 富岡製糸場誌編集委員会『富岡製糸場誌』（富岡市・1997年）
- 富岡市・岡野雅枝編『富岡製糸場——継承される革新の歴史』（Echelle- 1・2020年）
- 森下伸也『社会学がわかる辞典』（日本学術出版社・2000年）
- 和田英『富岡日記』（筑摩書房・2014年）

## 聞き取り調査記録

- A氏インタビューノート（2020年9月15日実施）
- B氏・E氏インタビューノート（2020年10月20日実施）（B氏・E氏に同時インタビューを実施）
- C・F氏インタビューノート（2020年12月20日実施）（C氏・F氏は同時インタビューを実施）
- D氏インタビューノート（2020年12月26日実施）
- G氏インタビューノート（2020年10月26日実施）
- C氏インタビューノート（2021年11月24日実施）
- H氏インタビューノート（2021年11月19日まちなかボランティアガイドの会講習会、2021年12月23日実施）